

## 明治期における図書館と博物館の組織的な併合と分離

星 佳奈

明治期に近代的な図書館と博物館の考え方が海外から導入された。明治初期に創設された図書館と博物館のひとつに、1872(明治 5)年に文部省博物局によって創設された書籍館と博物館がある。これらは変遷を経るなかで組織的な併合や分離を繰り返した。

本研究は、明治期に図書館がどのように認識されていたのか、またその認識がどのようなことについて一考察を試みるものである。本研究では、図書館と博物館の組織的な併合と分離に焦点をあて、それぞれの設置者の視点から考察をおこなった。研究の対象は 1872(明治 5)年創設の文部省博物局の書籍館と博物館、これらの流れを汲む図書館と博物館とし、期間は 1872(明治 5)年から 1890(明治 23)年までとし、対象とする図書館や博物館の規則や文書などの一次資料を中心に文献調査をおこなった。

本研究では、1)1872(明治 5)年 4 月 28 日文部省博物局の博物館と書籍館の併合、2)1876(明治 9)年 3 月 29 日東京書籍館と東京博物館の分離、3)1885(明治 18)年 6 月 2 日東京図書館と東京教育博物館の併合、4)1889(明治 22)年 3 月 1 日東京図書館と東京教育博物館の分離、に着目し、それぞれの背景から併合と分離について考察した。

まず、1872(明治 5)年 3 月に文部省博物局によって殖産興業の一環として博覧会が開催され、この博覧会を起源として博物館が創設される。そして 1872(明治 5)年 4 月書籍館が併設された。この併合に影響を与えたと思われる町田久成や市川清流の考えから、図書館は博物館の一部として認識されていたと考えられる。また、図書館は博覧会の一部であると考えられることもでき、殖産興業の一環として導入されたとも言える。つぎに、1876(明治 9)年 3 月の東京書籍館と東京博物館の分離からは、図書館と博物館が併合しているべきとの考えが文部省の中で薄れてきていたことが推察できる。一方、文部省には、教育という目的のために、博物館の発展をより重視するべきという考え方があったのではないかと考えられる。また、1885(明治 18)年 6 月の東京図書館と東京教育博物館の併合が、図書館と博物館の設置目的を考慮したものか疑問があることや、併合後に図書館や博物館の公開方法を変える試みがなされていることから、設置者の図書館と博物館に対する認識が確立されていなかったと考えられる。そして、併合によって図書館とは何かが再考され、設置者に図書館がひとつの独立した組織であると認識されたと考えられる。これが、1889(明治 22)年 3 月の東京図書館と東京教育博物館の分離となってあらわれたと言える。

明治期に近代的な図書館の考え方が海外から導入されるにあたり、当初図書館は博物館の一部と考えられていた。しかし、博物館との組織的な併合と分離の過程で、設置者の図書館への認識が確立され、図書館がひとつの独立した組織として認識されるようになったと考えられるのではないだろうか。

(指導教員 呑海 沙織)